公益財団法人 http://www.jkcf.or.jp

日韓文化交流基金NEWS

2016.3.28 | No. 77

The Japan-Korea Cultural Foundation

Contents

01 記念公演概要
02-03 公演内容ご紹介
04 公演の感想
05 青少年事業
年末に韓国から若い視覚障害教師と大学生が来日
全国視覚障害教師の会 重田雅敏
06 青少年事業
日韓青年の集い―故李秀賢君の足跡をたどって
07 助成事業
日韓国交正常化50周年記念 日韓陶磁器展 in 釜山
特定非営利活動法人 心を伝える会
理事長 沢柳則明
08-09 講演会
構造変容に直面し漂流する日韓関係：
過去・現在・未来
東京大学大学院総合文化研究科教授・
韓国学研究部門長 木宮正史
10-11 日韓文化交流基金事業報告
12 交流エッセイ
中学生だからこその日韓交流
～震災を乗り越えリーダーを育てる～
いわき市教育委員会
学校教育推進室学校教育課
指導主事 平山明裕

公益財団法人 日韓文化交流基金 〒105-0001 東京都港区虎ノ門5 丁目12 番1号 虎ノ門ワイコービル4F Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326

日韓国交正常化50周年記念公演を開催

未来に向けた友情を願って！

日韓文化交流基金では、日韓国交正常化50周年を記念して、「日韓基本条約」発効50周年記念日（12月18日）の前日である2015年12月17日、紀尾井ホール（東京都千代田区）にて日韓両国の青少年による共同公演「未来のために～歌でつづる日韓交流の歩み」を開催しました。

これまでの共同公演は、第3期日韓・韓日文化交流会議*の提言のフォローアップ事業として企画されました。2012年ソウル公演を皮切りに日韓両国で交互に開催されたこれまでの公演は、「日韓の伝統・現代芸術のコラボレーション」の実現を目指し、それぞれのジャンルで活躍するプロの芸術家たちが出演してきました。しかし、今回の公演「未来のために」は、中学生、大学生、大学院生等の青少年、若手音楽家たちが、日頃培ってきた力を披露し、すばらしいハーモニーを奏で、そして両国の未来に向けたメッセージを発してくれることを期待しながら企画しました。

当日は600人を超える多くの観客が来場くださり、子どもたちの澄んだ合唱や演奏により、会場は感動の渦にまきこまれました。また、公演実施にあたり、外部の専門家の方々よりたくさんのアドバイスをいただいたことで、多くの皆様にお楽しみいただける舞台になったと自負しております。新たな50年のために、時代に即した日韓交流を支えるため、日韓文化交流基金は今後もさらなる努力を惜しまない所存です。

本公演は日韓の音楽交流の歩みを振り返りつつ、未来に思いを馳せる意義深い機会となりました。公演後の鮫島会長主催レセプションでは、韓日文化交流会議の鄭求宗委員長による乾杯から始まり、日韓の出演者の和気あいあいとした交流が行われました。出演者をはじめ、関係されたすべての皆様にあらためて御礼申し上げます。

*2010～2012年度、日韓文化交流基金が日本側事務局を担当

「未来のために～歌でつづる日韓交流の歩み～」公演内容ご紹介

日韓国交正常化50周年という記念すべき年を祝うべく、未来を担う日韓の若者たちが一同に集結し、日本と韓国、両国で愛された歌を通して50年の歩みに思いを寄せると共に、未来に向けた友情を確かめ合うことを願ってプログラムを構成しました。

〈第１部〉

第１部は、国立音楽大学附属中学校合唱部とソウル市少年少女合唱団の「アリラン峠のさくら」で幕を開けました。この曲は日本と韓国を代表する「さくらさくら」と「アリラン」をもとに今回の公演のために、特別に編曲された曲で、団員は限られた練習時間だったにもかかわらず、舞台ではすばらしいハーモニーを披露しました。

続いて、東京藝術大学大学院のみなさんが日本の情緒が感じられる素敵な歌声を披露し、韓国芸術総合学校声楽科のみなさんが、韓国歌曲の中でも最も人気の高い一曲「懐かしき金剛山」ほか、韓国を代表する歌曲をうたうと、客席からは手拍子がわきおこり、会場は一気に一体化しました。

最後は、再び合唱団が登場し、「みんながひとつになって夢を追いかけよう」というメッセージが込められた「Together!」を友情の歌声で熱唱しました。歌の途中、両合唱団の生徒たちが握手し抱擁する姿に、会場から大きな拍手と声援が送られました。

01 ソウル市少年少女合唱団　02 佐々木美歌（ソプラノ）　03 湯澤直幹（バリトン）　04 韓国芸術総合学校声楽家によるオペラ

プログラム

第1部

「アリラン峠のさくら」　ソウル市少年少女合唱団／国立音楽大学附属中学校合唱部

「五木の子守唄」「瑠璃色の地球」　国立音楽大学附属中学校合唱部

「月よ月よ」「景福宮打鈴」　ソウル市少年少女合唱団

「荒城の月」「九十九里浜」　湯澤直幹
「この道」《花ものがたり》より「寒椿」　佐々木美歌

「帰りたい」　崔源進　「碑木」　金泰恩
「懐かしき金剛山」　金明熙　「麦畑」　崔盛圭

「Together!」　ソウル市少年少女合唱団／国立音楽大学附属中学校合唱部

第2部

朝鮮通信使行進

サムルノリ「三道農楽」　ハンヌリ演戯団（安俞姫、金暁蘭、李智熙、金香穂里）

パンソリ《春香歌》より「愛の歌」　金善、李指勲

「津軽よされ節手踊り」「民謡メドレー」「釜山港へ帰れ」
安藤龍正、佐藤公基、佐藤理加、沢田藍、山中裕史、吉田成美

「最初から今まで」（『冬のソナタ』主題歌）、「恋人よ」　北野里沙

「希望の国へ」　崔源進、金泰恩、崔盛圭、金明熙

「故郷（ふるさと）」「故郷の春」　全員

01 朝鮮通信使、ハンヌリ演戯団（サムルノリ） 02 金善（パンソリ）、李指勲（鼓手）による「愛の歌」 03 若手民謡チームによる伝統芸能
04 日韓の代表曲を歌う、北野理沙（シンガーソングライター）

〈第2部〉

第2部の冒頭では、「朝鮮通信使」に扮した日韓の大学生が会場を行進し、「これからの日韓関係は自分たちが担っていきます」と力強く宣誓すると観客から大きな拍手が寄せられました。続いて、行列に合わせて登場した韓国芸術総合学校伝統芸術院のハンヌリ演戯団による迫力のサムルノリの演奏に会場が沸きました。そして、同じく韓国芸術総合学校伝統芸術院のパンソリ歌手と鼓手が、日本でも人気の高い「春香伝（チュニャンジョン）」の一節「愛の歌（サランガ）」を熱演しました。また日本側からは、若手民謡チームが日本民謡や手踊りといった伝統芸能や、韓国歌謡の大ヒット曲、「釜山港へ帰れ」を披露しました。日韓の間では海を越えて愛された歌が他にも数多くありますが、「釜山港へ帰れ」は日本でもカバーされ、大ヒットした曲です。後半では、「50年」を振り返る意味で、日韓両国で共に愛されてきた歌謡曲を紹介。音楽を通じての日韓の大衆文化交流の歴史を振り返りました。日本での韓流の火付け役となるドラマ「冬のソナタ」の主題歌「最初から今まで」、韓国でカバーされた80年代の大ヒット曲「恋人よ」といった、代表的な2曲が披露され、幅広い世代の観客を魅了しました。

最後は出演者全員が再び舞台に立ち、観客と一緒に日韓を代表する童謡「故郷（ふるさと）」「故郷の春（コヒャンエポム）」を合唱し、感動のグランドフィナーレを迎えました。伝統音楽から現代音楽、そして合唱と、最後まで観客を飽きさせることなく、盛りだくさんの内容で本公演は幕を閉じました。

楽屋裏の様子紹介

国立音楽大学附属中学校合唱部とソウル市少年少女合唱団のみなさんは舞台上を降りてからも「音楽」という共通言語を通じ、楽屋で交流を深めました。子どもたちの素直な交流の姿勢にはいつもながら驚かされ、また子ども時代の異文化交流の重要性を改めて確認しました。

和気あいあいとした雰囲気の中で談笑する団員たち

書道を通じた日本・韓国大学生の交流書展作品

（日韓大学生交流書展出展作品）

当基金委託事業として国際書画芸術協会が2015年8月16日～18日、ギャラリーシビック（東京都文京区）にて日韓の学生による書道交流展を開催しました。ひらがなとハングル混成の書など多様な作品が展示され、「書」という芸術を通して日韓の作者同士が心をかよわせました。

日韓国交正常化50周年記念公演『未来のために』では、日韓の中学生合唱団の素直な、友を思いやるハーモニーが会場に響き、多くの人から感動したとのお声をいただいております。ここでは紙面の都合上、お二人のみに限り、感想をご紹介します。

国際交流　―若者への期待―

日韓国交正常化50周年記念公演「未来のために」を拝聴しました。「日韓両国が共に手を携えて前に進もう」という若者達の清晨な歌声が会場いっぱいに響きわたり、胸が熱くなりました。両国の少年少女合唱団員の大合唱「Together!」に及んでは、天空から降り注ぐ一条の慈雨に包まれたような、不思議な情景に捕われました。

私は、1990年より海外で日本文化・書道を紹介する活動をしてきました。何れの国においても、興味関心の高さと熱心な取り組みにパワーをもらいながら今日に至っています。書道を通じて出来ることは、単に書の技術交流のみならず、異なる文化を理解し、互いの立場を尊重する心を養うことにあります。その上で書の国際化が生まれ、延いては国際平和の実現に繋がるものと信じています。困難ではありますが、今後もこの活動は継続して行くつもりです。

このところの国際状況は、「書道」と「書芸」という同じ文化を担う日韓の関係においても、これまで培ってきた友好関係に不安を覚える時があります。例えば、第10回の記念展を迎えた「ソウルビエンナーレ」では、例年になく日本の出品者が少なく、個人的な勧誘をしても希望人数には至らなかったといいます。これらの現状を鑑み、また、「Together!」の合唱から受けた衝動を心に留めながら、若い人たちと一緒に何か出来ることはないかと考え、先ずは手近なことから始めてみることにしました。

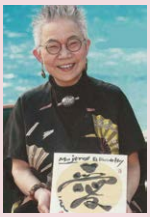
それは、昨年5月に完成した「墨の美術館」の活用です。永年住み慣れた自宅を改築した小さな美術館を、国内外の若者の文化交流の場としても活用することです。日韓を問わず世界各国の若者が「墨の美術館」で出会い、語らい、そして、理解しようとする姿勢と互いへの愛を持ち続ければ、「Together!」を合唱した少年少女たちが大人になる頃には、きっと未来は開けるものと確信しています。

差し当たり、第1回の集いはおひな様を飾った会場にアジアの児童画を展示し、留学生との文化交流会を行う予定です。「墨の美術館」を足場に、友達が友達を呼び、次第に交流の場が広がることを願っています。そして、2020年の東京オリンピックの際には、若者の輪が大きな渦となり、友好の場の広がりを見せてくれることを期待しています。

PROFILE

濱﨑道子（はまさきみちこ）

書道家。東京や京都など国内のみならず、欧米、トルコ、シンガポール、メキシコなど、世界各地で個展開催多数。「第4回世界女性会議・北京」やカンヌ・ジャパンフェスティバルなど世界を舞台に大字揮毫を行う。現在では個展開催のほか講演、ワークショップなど活躍の場を広げている



日韓国交正常化50周年記念公演『未来のために』感想

次々と繰り広げられる力のこもった演奏に、開演から終演まで感動しっぱなしでした。童謡・民謡・クラシック・ポップス、どれも素晴らしかったのですが、とりわけ印象に残ったのは、韓国歌曲と日本民謡です。

歌曲は初めて聞くものばかりで歌詞はほんのわずかしかわかりませんでしたが、「1音も聞き逃したくない。できるだけ多くの曲名とメロディーを覚えたい」と思うほど、心を揺さぶられました。私が唯一知っていたのは「ポリバ（麦畑）」です。地元沼津の少年少女合唱団のメンバーだった中学生のころ、韓国青年会議所からの訪問団をお迎えするために練習しました。大学で韓国語を勉強したときや、教員になって韓国視覚障害教師会と交流したとき、「ポリバ」の一部を歌えたことで、みなさんと一気に打ち解けることができました。今回この歌を初めて生演奏で聞くことができ、感激しました。帰宅してから「希望の国へ」など、記憶してきたそのほかの曲名をインターネットで検索してみたところ、残念ながらほとんど見つかりませんでした。隣国の代表的な歌が、日本でももっと知られるようになってほしい、と思います。

私はソーラン節などのなじみ深い民謡を聞くと、思わず手拍子をしたくなったり、掛け声をかけたくなったりして、つくづく自分が日本人であることを実感します。一緒に行った韓国人の友人は、「日本の民謡を聞いたのは初めてです。ほんとにかっこいいですね」と言ってくれました。音楽には、国籍や世代が違っても、人々の心を結び付ける力がある、と思います。日韓両国の人々が一緒に歌い、友情を確かめ合える歌が、今後ますます増えていくことを願っています。

PROFILE

大胡田 裕（おおごだ ゆたか）

全国視覚障害教師の会、静岡県立沼津城北高校教諭

年末に韓国から若い視覚障害教師と大学生が来日

今から4年前の全国視覚障害教師の会創立30周年を機に、海外の視覚障害教師の状況を知りたい、困っているなら応援したいとの思いで、韓国教師との交流を始めた。2013年12月末には、17名が訪韓し、初の日韓親善交流大会が実現、韓国側教師20名と念願の出会いを果たした。韓国教師会は、2009年に結成された新しい団体で、2006年の障害者雇用義務制度(日本では雇用促進法)の教員への適用開始により急激に会員を増やし約120名の会員がいる。ほぼ全員が7年に満たない新規採用の若い教師で、普通校と特別支援校で教えている。また、進んだインターネット社会を背景にして会員間の交流を図り、職場環境の改善を目指して活発に活動している。

2015年4月に日韓文化交流基金の青年交流事業の話があり、日韓国交正常化50周年記念事業として、韓国から視覚障害教師と大学生40名を招くことになった。全盲で日本に留学し盲学校や大学を経て企業で働く経験をした通訳のオ・テミン氏と、その奥様でJICAの日本研修旅行を経験したソウル盲学校のキム・インヒ先生が、沢山の若者や教え子を日本に連れてきた。若いころの外国での交流経験がその後の人生に強い影響を与え、日韓両国の橋渡し役としての種を二人にまいたのだ。これが2015年1月の第2回に次ぐ、第3回の日韓親善交流研修となり、日韓合わせて関係者101名、訪問先での交流約90名という大規模なものになった。頼りになったのは、2回の交流大会の実施経験と、これまで積み上げてきた日韓両国教師の強い絆である。

8日間の交流（表参照）では、一生懸命覚えた日本語で果敢に話しかけてくる若者、日本の歌を日本語で熱唱する若者、堂々と発表し聴衆の心を掴んだ若者がいた。日韓両国の参加者全員が両国の言葉の渦の中で、精一杯時間を惜しんで交流した。「魚は20年分食べた気がする」、「津波体験の話はショックだった」など彼らの印象は、日本の風土や見学先の体験として心に刻まれたに違いない。

日光江戸村では個別におかれた鍋を不思議に感じ、下町の人情劇を見て笑い、また、本所防災館では地震体験のない彼らが起震車で震度7の体験をしたが、悲鳴を上げながらも真剣に取り組んでいた。

東日本大震災の被災地の当時の様子を想像するために本所防災館で地震体験を行う韓国側参加者。

宮古では崩れた防潮堤や震災体験者の話を胸に、被災地のみなさんに楽しんでもらおうと一生懸命歌う姿が印象的だった。会長のキム・ホンヨップ先生も「遠くから応援している私たちのことを忘れないで」と会場に呼びかけた。7日目に訪問した岩手マッサージセンターでは、韓国理療のルーツである日本のあん摩を全員が体験し、センター挙げての大歓迎に感激した様子だった。

忘れてならないのは、彼らの研修旅行を助けた人々のことである。11名の通訳の大奮闘と、27名の同行者のおかげで、言葉の壁も生活上の壁も低くなっていた。また、訪問した先々で沢山の方々にお世話になり、温かい気持ちに包まれた。支援者を何人つくれるかが人生においていかに大切な要素となるか彼らもすでに知っていると思う。未来は若者の手にある。「幸せなら手を叩こう」を日本語と韓国語で交互にうたっていた日韓両国の若者が、共に手を携えて明るく平和な未来を開くことを願わずにはいられない。すでに日韓教師の会の垣根を越えた活動への参加や、メールなど個人レベルでの交流も始まっている。30年前に来日した二人の若者に宿った交流の種は、今ここに大きな花を咲かせた。今回の参加者80名の種は、いったいどこで、いくつの花を咲かせるだろうか。とても楽しみである。

「視覚障害者による被災体験発表と韓国音楽の集い」。

8日間の交流日程

日付	日程
12/24	来日
12/25	宇都宮市立中央小学校訪問 （視覚障害教師による音楽の授業見学） 鬼怒川温泉（江戸文化体験）
12/26	深川江戸資料館見学 本所防災館（地震ならびに洪水体験）、都内見学
12/27	早稲田大学見学 第3回日韓視覚障害教師の会親善交流大会
12/28	岩手県に移動、三陸鉄道乗車体験、津波被害と復興状況見学
12/29午前	宮古市民を招き視覚障害者による被災体験発表と韓国青年による音楽の集い開催
12/29午後 12/30	視覚障碍者のための手で見る博物館見学 岩手マッサージセンター訪問
12/31	都内見学、帰国

PROFILE

しげ た まさとし
重田雅敏

〈全国視覚障害教師の会〉代表。文京盲学校で社会と重複障害を担当。趣味はマラソン。ニューヨークマラソンで韓国語通訳の杉山長氏に伴走してもらい今回の交流事業を紹介された。〈全国視覚障害教師の会〉は34年前の国際障害者年に結成され、現在小・中・高・大学と特別支援学校に約100名の会員がいる。全国各地で孤立している視覚障害教師の拠り所として相談活動と研修活動をしている。〈全国視覚障害教師の会〉HP（http://jvt.lolipop.jp/）も参照されたい。

日韓青年の集い―故李秀賢君の足跡をたどって

2001年1月にJR新大久保駅で線路に落ちた人を助けようとして亡くなった韓国人留学生故李秀賢君の足跡をたどる中で、次世代を担う日韓の大学生が交流し理解を深め、日韓の「架け橋」を目指した故人の遺志を学ぶという企画が10月25日から8日間の日程で実施されました（主催：同実行委員会）。22名の参加者はJR新大久保駅を訪れ当時のことを学び、その他故人ゆかりの日本語学校でのプログラム、また関西地域の見学やホームステイを体験しました。本号ではこの企画に参加した学生の感想を紹介します。

日韓関係への真摯なまなざし

東義大学校漢医学科 2年 宋政炫（ソンジョンヒョン）

「日韓青年の集い-故李秀賢（イスヒョン）君の足跡をたどって」に参加した宋政炫と申します。私はこの度、2015年10月25日から11月1日まで、日本政府の援助により、日本の東京、千葉、神奈川、京都、奈良、大阪を見学することができました。ただ本でのみ学んだ日本を実際に見られる、いい経験になりました。また、今回のプログラムは、私が今まで参加したさまざまな日韓交流、日本見学プログラムの中でも最高でした。私が印象深かった部分と感じたことを記したいと思います。

今回出会った日本の大学生たちは、日韓問題について明白な問題意識を持っている学生たちでした。このプログラムに参加する以前に、多数の日韓交流プログラムに参加したことがありました。交流会に出席する度にいつも感じることは、そこで出会う人々は皆総じて韓国好きではあるのですが、日韓がなぜこのような関係になったのか、そして、どうすれば関係が改善するかについて全く考えていないということです。だから、今回の行事に参加する前までは、民間交流がどんなに活性化したとしても、お互い全く問題意識を感じない状態では発展もないのではないかと、日韓の民間交流を悲観的に認識していました。しかし、今回の交流会で出会った日本人学生たちは大きく違っていました。ただお互いの文化や言語について話し合うだけにとどまらず、積極的に日韓関係についての話題に応じてくれました。多くの学生が個別のさまざまな争点を詳しく知っており、それに基づいて自分たちの意見を披露してくれました。私は大変感銘を受け、両国の青年たちが日韓関係改善のために勉強し、お互い努力したならば必ずよりよい未来になると確信するようになりました。

また、今回のプログラムは構成が本当に満足できるものでした。まず、関東と関西の有名な場所は大部分見てまわれ、何より日本のさまざまな遺跡に刻まれた韓民族の痕跡を見ることができました。私が一人で旅行したとしたら、7泊8日の日程でこんなに多くの場所を見てまわることはできなかったと思いました。中身の詰まったスケジュールを立ててくださった、日韓文化交流基金の方に感謝の言葉を伝えたいです。

奈良県知事表敬訪問。（写真提供：「日韓青年の集い」実行委員会）

今回の見学で一番大きなテーマはまさに、李秀賢さんについて学び、その精神をつないでいくことでした。実は私は、日韓文化交流基金で李秀賢さんについて学ぶまで、彼について全く忘れて生きてきました。しかし、今回の行事に参加して日本人たちの中にも李秀賢さんの死を追悼し、その精神をつないでいくため努力していらっしゃる方がたくさんいるという事実を知りました。また、この行事とは関係なく、私が知っているたくさんの日本人に李秀賢さんの話をしたことがありましたが、「韓国の学生が、線路に落ちた日本人を助けるため死んだ事件」を知らない人はいませんでした。この二つの事実は私に大きな衝撃を与えました。そして、私が日韓関係を見る角度は完全に変わりました。

日本人も、韓国人と全く同じように共感し、お互いを理解するために努力しています。また、実際の日韓関係の進展はまだまだですが、韓国人と日本人は大変近づいたと思います。国籍を超えた愛という李秀賢さんの精神がずっと続いていったなら、日韓関係は必ず改善すると信じています。私もまた、韓国と日本の架け橋になれるよう頑張ります。

JR新大久保駅で故李秀賢さんの顕彰碑に献花。（写真提供：「日韓青年の集い」実行委員会）

日程

日付	内容
10/25	成田空港から入国　千葉県浦安市で東日本大震災被害についての視察、JR新大久保駅　故李秀賢顕彰碑を訪問・献花
10/26	日産追浜工場見学、早稲田大学見学、歓迎夕食会
10/27	江戸東京博物館見学、都内にて文化体験
10/28	東京スカイツリー見学、浅草散策、赤門会 （故李秀賢氏が通った日本語学校）訪問（日本語体験授業）
10/29	京都へ移動、広隆寺、清水寺見学
10/30	奈良公園・東大寺見学、奈良市内（奈良町）散策、 奈良県知事敬訪問、明日香村にてホームステイ
10/31	ホームステイ、興福寺見学
11/1	大阪へ移動　道頓堀エリア散策、大阪市内　鶴橋地区見学 （故李秀賢氏祖父縁の地）、関西国際空港発

日韓国交正常化50周年記念 日韓陶磁器展 in 釜山

特定非営利活動法人
心を伝える会　理事長
沢柳則明

日韓陶磁器展in釜山

2015年10月14日（水）～18日（日）の5日間、日韓国交正常化50周年という節目の年を迎えるにあたり「日韓陶磁器展in釜山」を韓国釜山広域市内にて開催しました。

世界有数の芸術品として評価を得ている日本の陶磁器のルーツは15世紀末に朝鮮半島出身の陶工たちが海峡を越えやってきて伝えられたといわれています。その後、日本の多くの地で独自の発展を遂げ、世界有数の芸術品として現在大きな評価を得るまでになりました。

今回、日韓両国の多くの窯元や関係者の協力のもと、韓国国内で各々の作品を一堂に会した展示会を開催することができました。

事業の企画段階では、日韓両国が政治的に不安定な状態であり、日本で独立して存在する各窯元の間の調整などあり、実現は難しいのではと各方面からご意見をいただきました。会場選定に関しても、いろいろな候補があがる中、少しでも多くの方々の目に触れる方が良いだろうと選びに選んで決めた会場が、急遽先方の事情でキャンセルになったり、参加を予定していた窯元が出品を取りやめたりと本当に多くの事が起きました。

それでも、なんとしても実現するんだという信念のもと、現地へ足を運び、さらに各地・各窯元を訪ねて回り、と苦悩した日々を過ごしました。

そんな日々を重ねたのち、ようやく全体の形が出来上がり訪韓した展示会前日に、日韓両国の作家、関係者を交え、在釜山日本国総領事公邸にて歓迎レセプションが開かれました。韓国作家の中には日本での修業時代の話で盛り上がったり、翌日には、日本の作家たちが実際に韓国の窯元を見学の為に訪問し、陶磁器談議に花を咲かせたようです。そんな親睦を深めている姿を見たとき、このような機会を作れた事に大きな成果と喜びを感じました。

開催期間中の会場には様々な国からのお客様が来場され展示物を興味深くのぞき込み、中には熱心に質問されるお客様もいらっしゃいました。

今回の展示会は、規模は小さいながらも陶磁器を通して日韓両国の歴史的背景や関係の深さを再考する良い機会になったと考えています。また、芸術は人種や国境にも左右されないということや、朝鮮半島出身の陶工たちの優れた技術、これを支え成長させた日本の文化を広く知らしめる良い機会となったと感じています。

日韓両国の関係は、政治レベルでは様々な問題を抱え一進一退を繰り返していますが、民間草の根レベルでは大切な隣国としてお互いを理解し、交流を続けていかなければならないと強く感じています。

1983年以降、慰問事業を始めた当初は、日韓の国交はあったとはいえ、まだ公には日本語を話すことも憚れる時代でありました。そんな状況下、在釜山日本国総領事館の地下で慰問公演を開催したりしましたが、現地警察から何故、日本人が集まっているのかと追及されたりと今では考えられない事も多数ありました。当会においては三十年来、日韓を中心に世界各国、また日本国内における文化交流事業や支援事業を行って参りましたが、今後とも可能な限り、継続していきたいと考えております。

なお、本事業開催にあたっては、日本からKBC九州朝日放送やSTSサガテレビの同行取材を始め朝日新聞社や西日本新聞社取材、また在釜山日本国総領事館ほか、貴基金をはじめとする本当に多くの御協力をいただきましたこと、また日頃から当会の活動にご理解を頂きご協力をいただいております企業・個人の方々に支えられて活動が継続出来ていることを、この場を借りて心より感謝申し上げます。

松井貞夫在釜山日本国総領事（右端）と、
手を取り合う日韓の作家。

PROFILE

沢柳則明（さわやなぎのりあき）

2004年、特定非営利活動法人 心を伝える会設立。ばってん荒川や市原悦子をはじめ、歌手やしまひろみ（日本クラウン）の制作や、行政のPRCD制作までプロデュースする。現在、㈱沢柳企画（1980年創立）経営の他、1981年から続けている在韓日本人への支援の他、近年では、在釜山日本国総領事館主催のJAPAN WEEK（釜山広域市昌原市）事業協力その他や駐福岡大韓民国総領事館主催のハンマウム♡フェスティバル（福岡県福岡市開催）事業協力その他など日韓両国国民を対象とした交流事業も精力的に行っている。韓国に対する永年にわたる交流・支援などの様々な活動に対して、2010年、外務省より在外公館長表彰、2014年、ふくおか共助社会づくり表彰を受ける。

構造変容に直面し漂流する日韓関係：過去・現在・未来

東京大学大学院総合文化研究科
教授・韓国学研究部門長
木宮正史

1．日韓国交正常化交渉をどう評価するか

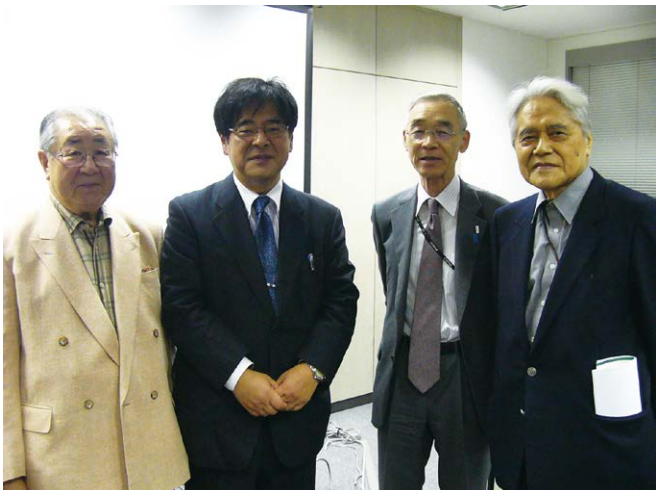
最近の日韓関係に緊張激化の一因を提供した二つの司法判断、2011年8月韓国憲法裁判所による「慰安婦問題などは1965年の日韓請求権協定で未解決だという韓国政府の立場に基づくと慰安婦問題に関する韓国政府の対日交渉の不作為は違憲だ」という判断、2012年5月韓国大法院（最高裁）による、「強制徴用に対する未払い賃金の請求権が時効などによって消滅したという判断は、併合に至る諸条約が違法無効ではないという歴史観に立脚したものであり、韓国の正統な歴史観とは背馳していて認められない」という判決は、日韓国交正常化の交渉過程で対立があり、そうした違いをそのまま持ち越しした日韓基本条約および請求権協定をめぐる解釈における違いを背景にしたものである。

日韓国交正常化は、植民地支配の清算が重要な問題となるはずだったが、それよりも冷戦状況が深刻化する中で日韓関係をどう構築し協力するかを優先した。これに関して、当時の韓国朴正熙政権も、日本との経済協力を通して経済を発展させることで北朝鮮との体制競争において勝利を収めるという目標を優先させた。日韓交渉は、交渉の枠組みを形成する力関係において韓国よりも日本が優位であったという状況、植民地支配などの歴史認識に関する日本社会の「鈍感さ」を与件とすると、国交正常化はこのようにならざるを得なかったと言えるかもしれない。しかし、その後の、日韓の力関係の変化、植民地支配に関する日本社会の認識変化という条件変化が起こるとすると、既存の解決枠組みに修正を迫る政治力学が生じることになる。

2．日韓関係の現状をどのように見るのか：構造変容とその帰結

冷戦期の日韓関係は、歴史認識問題などの日韓の間の諸問題が存在したにもかかわらず、それを上回る「接近」と「協力」の政治力学が作用することで、「それほど悪くはない関係」が維持された。

スライドを使いながらわかりやすく日韓関係について講演していただきました。



講演後、歓談する（左から）鮫島章男会長、木宮先生、片山修中央日韓協会副会長、梅田博之評議員。

後半、ポスト冷戦期の日韓関係は「非常に起伏の激しい関係」であった。日韓の距離が縮まったことは間違いないが、それまで封じ込められていた日韓の間に存在する諸問題が一挙に噴出した。その背景には、次のような日韓関係の構造変容が存在する。

第一に「水平化」である。韓国の持続的な経済発展に伴って日韓の経済的格差が急速に縮まるとともに、国際政治における韓国のプレゼンスも増大することになり日韓関係は水平的なものに変容した。第二に「均質化」である。韓国の持続的な経済発展と政治的民主化は、市場民主主義という価値観を共有する日韓関係を成立させた。第三に「多様化・多層化」である。日韓関係が、社会・文化領域など多様な領域を含む関係に広がるとともに、市民同士の交流が深まり市民社会全般を含む多層的な関係へと変容した。第四に「双方向化」である。価値、情報の流れに関して、日本から韓国に向かう量だけでなく、韓国から日本に向かう量も飛躍的に増大し、両者の均衡がとれるようになった。

では、こうした日韓関係の構造変容がどのような帰結をもたらしたのか。第一に、「水平化」をめぐる対応の乖離である。以前は日韓の「垂直的関係」に応じて韓国に「寛容」であった日本が、「水平化」した韓国に対して、パワーの増大に応じたより「責任ある対応」を求めるようになる。韓国では、自国のパワー増大と、それに応じた交渉力増大を背景に、十分にできなかった対日要求を今こそ貫徹するべきだという認識が強まる。第二に、「均質化」をめぐる認識の齟齬がある。日本から見ると、本来であれば価値観を異にするはずの「中国寄り」の姿勢を韓国がとっている、さらに「報道の自由」を疑わせる対応が見られるという認識がある。韓国では、慰安婦問題などに関する日本の消極的な姿勢などを考慮すると、価値観を共有するとは言い難いという批判がある。第三に、「多様化・多層化」に伴う問題の複雑化である。氾濫する情報に基づいて相手国に対する強硬論が台頭し、それに対して日韓両政府のコントロールが利かずに、国内の強硬論に引っ張られて

しまう。第四に、「双方向化」に伴う相互不信の増幅である。韓国における厳しい対日世論に日本の対韓世論が敏感に反応し、さらに、そうした日本の対韓世論の悪化に韓国の対日世論が敏感に反応することで、関係悪化を双方から増幅する力学が作用する。

3．「もう一つの日韓関係」の可能性

しかし、こうした現状は、日韓関係の構造変容から一義的に帰結されるわけではなく、それに代わる選択の可能性もあるはずだ。水平的な関係を認め合うことによって、共通課題にどちらが有効に取り組むことができるのかという意味で「競争的」であり、課題の取り組みに関する知恵を出し合うという意味で「協力的」な関係に進化させることも可能なはずである。価値観の共有部分を相互に認識し、それに基づいて問題解決を探ることも可能ではないか。慰安婦問題を、「韓国対日本」という図式ではなく「戦時下における女性の人権侵害」という共通の普遍的な問題意識に基づいて位置づけ、問題解決に共同で取り組むことは可能ではないか。2015年12月の慰安婦問題に関する日韓政府間合意は、その出発点になり得るはずだ。網の目のように張りめぐらされたネットワークは、極限的な対立関係にエスカレートするのを相当程度抑制する。さらに、相互のコミュニケーションをより一層密にすることによって、相手の情報が、自国だけで都合良く消費されてしまうという状況を回避し、相互に発信する情報が、相手国にどのように受け入れられるのか、そして、そうした情報流通が、どのような効果を持つのかを考慮することも可能なはずである。

日韓関係の構造変容は、葛藤を増大させる原因を提供することは確かであるが、そうした葛藤を解消するための「能力」を提供することにもなる。問題は、そうした「能力」を獲得し発揮することができるのかどうか、そうした選択をすることができるのかにかかっている。

4．「国際公共財」としての日韓関係

日韓は米国との同盟関係を共有し、米軍の駐留を受け入れ、その費用も一部負担する。そうした状況下で、日韓の葛藤に起因して米国に向けての支持獲得競争を過度に展開することは、日韓双方にとって対米交渉力の低下をもたらし、同盟維持に関わる費用負担をより一層重く担わざるを得ないことになる。日韓が米国との同盟関係を共同で管理することによってその費用負担を抑制するとともに、対米同盟関係の効果を最大化することができるはずである。

中国の大国化に対して、日本は対米同盟の強化を軸に対応する。それに対して、韓国は良好な米中関係が維持されることを「与件」として、対北朝鮮政策に関する中国の影響力行使に期待をかける戦略を追求する。日韓関係の緊張は、中国の大国化に対するこうした対応の違いにも、その原因がある。しかし、東アジア国際秩序の形成を主導する「責任ある大国」としての役割を中国に担わせるために、共有する対米同盟をどのように活用するのかに関して、日韓には大きな利害の乖離は本来ないはずである。東アジアの国際秩序を公正で透明なものにするためにも、中国の影響力だけが突出するよりも、それ以外の国の影響力がある程度担保される方が望ましい。そうした役割を担い得る存在として日韓がいかに協力して中国に対する発言力を持ちうるのかが重要である。

対北朝鮮関係に関しても、現状では、日朝関係の改善を韓国が警戒しているという構図がある。中国の対北朝鮮政策を「韓国寄り」に変えさせ、北朝鮮を孤立に追い込むことで、北朝鮮を韓国との関係改善に向かわせる条件が整いつつあるにもかかわらず、日朝関係の改善は北朝鮮に他の選択肢を与え、南北関係の改善にブレーキをかけるという警戒感である。しかし、対北朝鮮関係において、韓国の立場に最も近いのは日本である。双方にとって直接脅威となる北朝鮮の核開発に対応し、日本は拉致問題解決のため、韓国はより有利な環境で南北関係を主導するために、対北朝鮮政策に関する日韓の協力は相互の利益に寄与するのみならず、東アジア地域の平和的な秩序にとって必要な「国際公共財」である。

講演会を通じての各界代表者の出会い。権鎔大日韓交流祭り協会事務局長（左）と梅田博之評議員／麗澤大学名誉教授（右）を互いに紹介する余田幸夫事務局長（中）。

来場者の関心事にも真摯に応える木宮先生。

PROFILE

木宮正史（きみやただし）

東京大学大学院総合文化研究科教授、韓国学研究部門長。1960年静岡県生まれ。韓国高麗大学大学院修了（政治学博士）。主要著書『国際政治のなかの韓国現代史』『朴正熙政府の選択:1960年代輸出指向型工業化と冷戦体制（韓国語）』。編著書『日韓関係史1965～2015I政治』『朝鮮半島と東アジア』など多数。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2015年度第3四半期（2015年10月1日から12月31日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生（外交部）	ソン・ジョンウン 韓国外交部	30	10	20	10/27～ 11/5	兵庫県南あわじ市、東京工芸大学
韓国大学生（第1･2団）	呉炫錫（オ・ヒョンソク）ソウル神学大学校教授 李洲浩（イ・ジュホ）国立国際教育院書記官	40	22	18	11/10～ 11/19	北海道上川郡東川町、目白大学、旭川福祉専門学校
韓国大学生（第3･4団）	鄭璣淵（ジョン・ギヨン）忠北大学校事務官 李昌秀（イ・チャンス）慶熙大学校外国語大学日本語学科教授兼言語教育院長	40	21	19	11/10～ 11/19	北海道札幌市、神田外語大学、小樽商科大学
韓国教員（第3団）	曺連（チョ・ヨン）安山梨湖初等学校校長	20	5	15	12/1～ 12/10	愛知県稲沢市、港区立東町小学校、稲沢市立稲沢北小学校、賢明学院小学校
韓国教員（第4団）	金殷實（キム・ウンシル）ソウル黒石初等学校校長	19	9	10	12/1～ 12/10	香川県高松市、新宿区立四谷小学校、高松市立高松第一小学校、賢明学院小学校

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国中学生（第1団）	吳榮錄（オ・ヨンロク）忠清北道教育庁奨学士	30	16	14	10/8～ 10/14	札幌市立伏見中学校
韓国中学生（第2団）	李洪圭（イ・ホンギュ）高陽中学校校長	30	17	13	10/22～ 10/28	富良野市立富良野西中学校
韓国中学生（第3団）	尹己鉦（ユン・ギジョン）求禮東中学校校長	30	10	20	11/5～ 11/11	天草市立新和中学校
韓国中学生（第4団）	申順惠（シン・スンヘ）鉢山中学校校長	30	8	22	12/10～ 12/16	浦添市立神森中学校

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国高校生（第1団）	金寅鐘（キム・インジョン）明徳外国語高等学校校長	50	18	32	10/8～ 10/14	北海道豊浦町、北海道シュタイナー学園いずみの学校、札幌市立札幌開成高等学校、札幌市立啓北商業高等学校
韓国高校生（第2団）	趙珉喆（チョ・ミンチョル）忠清南道教育庁奨学官	50	23	27	10/22～ 10/28	北海道上川郡東川町、 北海道南富良野高等学校
韓国高校生（第3団）	黄煐南（ファン・ヨンナム）泳薫高等学校校長	50	27	23	11/5～ 11/11	熊本県天草市、 熊本県立牛深高等学校
韓国高校生（第4団）	尹花淑（ユン・ファスク）世宗市教育庁奨学官	50	20	30	12/10～ 12/16	沖縄県南城市、 沖縄県立陽明高等学校

カーリング体験（韓国中学生訪問団第2団）

映画祭本選出場（アジア国際子ども映画祭参加訪問団）

黒石初等学校訪問（日本教員訪問団第1団）

訪韓団

団体名	団員代表	計	男	女	期間	主な訪問先
日本教員（第1団）	鈴木 恒希　大船渡市立立根小学校教諭	17	10	7	11/17～ 11/26	黒石初等学校、天旺中学校、鐘路産業情報学校、忠北大学校

団体名	団員代表	計	男	女	期間	主な訪問先
日本教員（第2団）	髙橋 史行　三郷市立彦成小学校教諭	17	11	6	11/17～11/26	花峰初等学校、天旺中学校、深遠高等学校、慶熙大学校

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
佐賀県中学生	中島 裕二　佐賀大学文化教育学部附属中学校副校長	50	23	27	10/4～10/10	高陽中学校
沖縄県高校生	宮城 保　沖縄県教育庁県立学校教育課	50	4	46	10/18～10/24	泳薫高校 忠北大学校
千葉県高校生	宮﨑 浩章　千葉県立長生高等学校教頭	50	7	43	11/15～11/21	明徳外国語高校 公州大学校

その他の訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
アジア国際子ども映画祭参加訪問団	李弦洙（イ・ヒョンス）梅香女子情報高校教諭	10	1	9	11/24～11/30	北海道北見市 神奈川県立弥栄高等学校、北見工業大学
韓国青少年音楽交流団	元鶴淵（ウォン・ハギョン）ソウル市立少年少女合唱団他	33	9	24	12/15～12/18	国立音楽大学附属中学校（ソウル市少年少女合唱団） 東京藝術大学（大学生・大学院生）

2 学術定期刊行物助成

人文社会科学分野の研究成果として刊行された下記の学術定期刊行物に助成しました。

○『韓国朝鮮の文化と社会 第14号』（韓国・朝鮮文化研究会編、株式会社風響社）
○『現代韓国朝鮮研究 第15号』（現代韓国朝鮮学会編、中西印刷株式会社）

3 第15回日韓歴史家会議*開催

本会議は2015年11月6日（金）から8日（日）の3日間、「植民主義と脱植民主義：世界史的視野から」というテーマのもとソウル大学校内ヤン・ドゥソクホールにて開催されました。初日には石井寛治東京大学名誉教授と金泰永慶熙大学校名誉教授による記念公演、翌日からは「帝国主義と植民主義：研究現況と課題」「‘帝国’の展開と植民地の対応」「脱植民主義の現在と未来」という3つのセッション別に報告と討論が行われ、活発な議論が展開されました。

*この会議は2001年に日韓両国の歴史研究者間の学術的な「交流の場」として発足。日本史、韓国史の専門家のみならず、幅広い分野の歴史研究者が会議に参加し、最新の歴史研究の成果をもとに意見交換と討論を行っています。

参加者名簿

○日本側参加者
浅田進史（駒沢大、ドイツ・東アジア関係史）／石井寛治（東京大、日本経済史）／板垣雄三（東京大、イスラーム学）／木畑洋一（成城大、イギリス現代史・国際関係史）／竹中千春（立教大、国際政治・南アジア政治・ジェンダー研究）／平野千果子（武蔵大、フランス植民地史）／藤井篤（香川大、ヨーロッパ政治史）／堀和生（京都大、アジア経済史）／松本武祝（東京大、農業・資源経済学）／宮嶋博史（成均館大、朝鮮史）

○韓国側参加者
金伯哲（ソウル大、韓国史（朝鮮時代史））／金榮漢（西江大、西洋思想史）／金泰永（慶熙大、韓国史（朝鮮時代史））／金亨冽（東義大、中国近現代史（中国都市史））／朴枝香（ソウル大、英国史）／朴薫（ソウル大、明治維新史）／裵京漢（新羅大、中国現代史（政治・思想史））／李永石（光州大、英国史（社会史））／李榮昊（仁荷大、韓国近代史）／李鎔在（全北大、フランス現代史）／李宰源（延世大、西洋現代史（フランス帝国主義））／鄭尚秀（韓国放送通信大、国際関係史（外交史））／車河淳（西江大、西洋思想史）／李泰鎮（ソウル大、韓国史（政治・社会史））／許粹烈（忠南大、韓国経済史）

日程

日付	内容
11/6	記念講演会「歴史家の誕生」〈司会〉金榮漢（西江大） 「私の韓国史研究の旅程」金泰永（慶熙大） 「近代日本経済史から全体史へ」石井寛治（東京大）
11/7	第1セッション 帝国主義と植民主義:研究現況と課題〈司会〉裵京漢（新羅大） 「帝国植民主義の遺産と克服」朴枝香（ソウル大） 「近現代世界と帝国主義・植民地主義」木畑洋一（成城大）
	第2セッション ‘帝国’の展開と植民地の対応〈司会〉李永石（光州大） 「‘アルジェの戦い’（bataille d’Alger）とフランス共和国の危機」李宰源（延世大） 「植民地期朝鮮人の一人当たり所得と消費に関する議論の検討」許粹烈（忠南大） 「世界経済史での植民地支配の意義―日本帝国の性格と特徴―」堀和生（京都大）
	「ドイツ植民地経済政策における世界的視野―山東落花生から考える―」 浅田進史（駒沢大） 〈指定討論〉 藤井篤（香川大）松本武祝（東京大）朴薫（ソウル大）金亨冽（東義大）
	第3セッション 脱植民主義の現在と未来〈司会〉李永石（光州大） 「ポストコロニアニズム時代の東アジアにおける国際政治のパラダイム」 鄭尚秀（韓国放送通信大） 「植民地支配の過去と歴史認識-フランスの事例から」平野千果子（武蔵大） 〈指定討論〉竹中千春（立教大）李鎔在（全北大）
11/8	第4セッション総合討論〈司会〉李榮昊（仁荷大） 発表者,討論者,司会者等参加者全員

中学生だからこその日韓交流

～震災を乗り越えリーダーを育てる～

いわき市教育委員会
学校教育推進室学校教育課
指導主事　平山明裕

震災、そしてリーダー育成

東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故が起こってから5年、復旧・復興は目に見える形で進んでいますが、震災前の状況に戻るのには、まだまだ長い年月が必要です。

しかし、このような状況だからこそ、いわき市では、子どもたちが、たくましく生きる力を身に付けることが大切であり、さらに、ふるさとの復興を担い、次代をリードする人材を義務教育段階から育成していく必要があると考え、平成23年度から「いわき生徒会長サミット」事業を展開しています。この事業は、市内全ての中学校の生徒会活動を活性化させるとともに、30年後のいわき市を担うリーダーを育成するため、各中学校の生徒会長を中心としてリーダーシップの育成を図り、いわきを支え、いわきから世界へはばたく人材を育成することを目的としています。

我々が目指すリーダー像の一つがグローバルな視野を持ったリーダーです。中学生のうちに海外を見せ、体験することが視野を広めるもっとも有効な手段であると考え、機会をとらえて積極的に海外へ派遣しています。平成24年度から派遣している韓国は、一番身近に世界を感じ、グローバルな視野を一気に広げられる国と考え、本事業の中でも最も重要な研修の１つとなっています。

中学生の学びと変化

派遣された中学生は、一週間の訪韓研修の中で、韓国の経済力や朝鮮半島の休戦状態を実感するとともに、日本の平和への努力と平和であることの幸せについて学びます。一方、派遣生徒は、韓国に対するイメージの変化を経験します。派遣前の韓国のイメージでもっとも多かったのは、授業で学習する歴史的なことや、領土問題等の外交問題、それに付随する「日本は嫌われている」という負のイメージです。しかし、派遣の途中から彼らの負のイメージが払拭されてきます。特に、一日滞在する現地中学校では、熱烈な歓迎を毎年受け、昼休みには、日韓入り混じって野球やサッカーをしたり、授業の合間には、いわきの生徒を取り囲んで、一緒に写真を撮ったり、会話を楽しんだりしました。また、福島の現状を伝えるプレゼンテーションには、真剣に耳を傾けてくれました。そこには、報道で伝えられるような日韓関係の緊張感はどこにもありません。仲良くやっていきたい、理解し合いたいという、両国中学生の素直な気持ちがあるだけでした。

互いの思いを伝え合う日韓の中学生。

中学生だからこそ必要な韓国派遣

訪韓研修を終えた中学生は、劇的に変化します。人生の中で最も多感な中学生は、感受性も強く、見聞したり、体験したりしたことを素直に受け止め、驚き、喜び、そしてそれらを自分の変化（成長）へとつなげられます。それは万国共通であり、日韓の中学生が出会うことで、大人同士が出会う以上の化学反応を起こし、中学生だからこそ立派な親善大使として、両国のよさを伝えられたのではないかと感じます。

また、中学生の変化は、心情的なものだけにはとどまらず、韓国の素晴らしさや両国間にある難しい関係を肌で感じ、帰国後、認識や考え方の変化や行動の変化へとつながっていきます。中には自分の進路を変える生徒まで出てきましたが、彼らは中学生であることから、自分の新しい夢を見つけたとき、その夢に向けて進路を変えることができるのです。

「人付き合いは相手を知り、相手の良さも悪さも認め合い、心を開いて受け入れることから始まり、その延長線上に国際社会があるにすぎません。」これは、訪韓研修に参加した生徒の作文の一節です。この作文は、日韓文化交流基金30周年記念作文コンクールの最優秀賞に選ばれ、さらに外務省が発行する『外交青書2015』に掲載されました。彼のもともとの夢は学校の教師でしたが、訪韓後、国際社会で教育に携わる仕事がしたいと変化し、高校進学後も生徒会長となって、昨年は世界の若者が集まる国際会議に日本代表として参加しています。未来で活躍する人財や良好な日韓関係の原点が、中学生の訪韓研修にはあると思います。

日韓の架け橋になる中学生たち。

PROFILE

ひらやまあきひろ
平山明裕
いわき市教育委員会学校教育推進室学校教育課指導主事。公立中学校教頭を経て平成25年度より現職。いわき生徒会長サミットの担当として、中学生のリーダーシップ教育に注力。これまでに3回、中学生の訪韓研修を引率している。